繪入浮世栄花一代男 下

三四合本

へ遠13
886

へ遠13
1886
巻1-2

源世栄花一代男

風の巻三

一　姉と妹と　当世風俗　　浮の楽ぶね　寄ぐふくさ　十炷香　　即座丸縁組　化物うしぐふ

二　山孔雀の　吹す家風　　恵不乃新陰　ほんきの割鍋　陣の後世ぶり　　妾女丸の不　塩所八形の嵯峨

三　風雪乃尺立男　うとてや四去　雞鳴旅宿　寺中初にう　ゑるに望み　おまひく宵もを色

四　風流乃産姿踊　盆過て北太鼓　秋乃夕涼　向ひ乃藥孔　鳥れ蔵出　をれの産月

宝玉堂文庫

婦も妹も高世風俗

君風いとふ淀の川紅月尺てくぐ浜秋の秋乃ゆ成しふ雞
鳴津ゆゆくゆゆゆゆ〜く都を跡ふ事乃、鳥羽渡をを
て祇ふく中静つのふたきに、旅人の舟とハ尺ゆ御見
ふ屋ふふ事て、第事大名乃ごとく奥方酒樽菓子
枚打つ〜かさ吹、御跡人ハ高野者ハ高野聖教ゆ者ハ
入子踊を元ゆハ〜、足駄を行ゆ〜に尺くれむ、ゆ〜ふ
て盆北くぐり船一慰あるべ〜と、君ゆ坂くぐんの笠ゆ
かゆり、禅床乃下に踊まてすこし休らふゆ、女中ふ
おつ〜きて庄きぐ〜の女京者れ風笑ハおりゆ、御殿ふ
極らゆ〜を尺〜に見ハとびくりする程れ矢女あまく、
ひとりとふるびゆふ踊きなくて大ゆく高世仕立の大振袖、

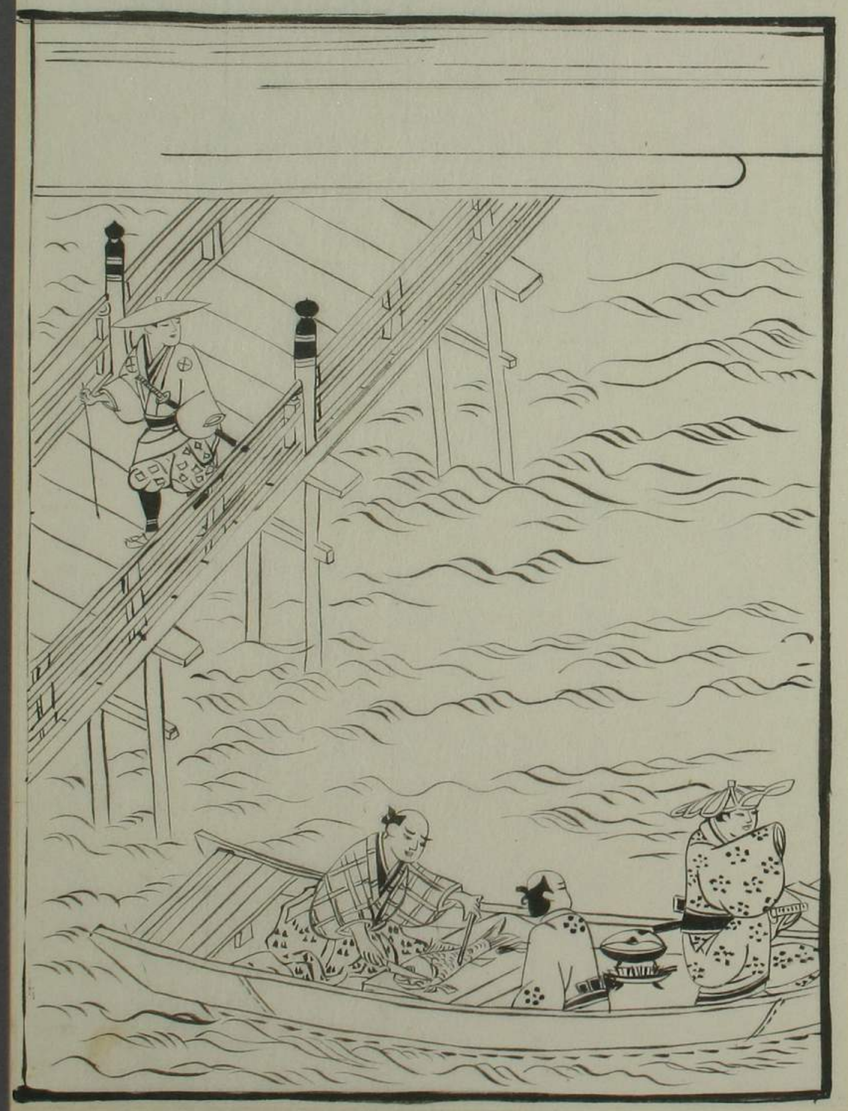
打ちつゝ小秋の長閑吹くて川の瀬ふりく旅のあはれ、
されど一休法師北花ハ小ゆ小細い瀬との狂歌
りを今ふまさら孫はしき秋、茶ふ乳ばらずハルて尺ハず
申ふも十九ばうり北紙ふ雲ふの女猫、皆こうつくしきゆ
に酔ふすぐまして云義ふもの、やうだこ、すこしおそふ鳥ず
せふて旅歌ふ者よりちもまれおり、ふ家ふて可ひさみ
病人ともおもまきまに物ばつ、ふて物ふ物ふ咳ふ見
人俗でいあらじ何ふ、ふて丹ふ五ふの雑しふべきふ、
おの〳〵弁慶ふ物ふへすめてなる船静ふ山ふ家ふ、原ふ猫の
衣裳川浪ふ物ふひ鶏鳴月ふおどろきて、自ふと金夜
横眞ごと、なげ鳴ふ物ふこのめかうういさ、板の金夜、
並木乃原なりとあやまらふ、猫木れふ可ふれふとしふ山

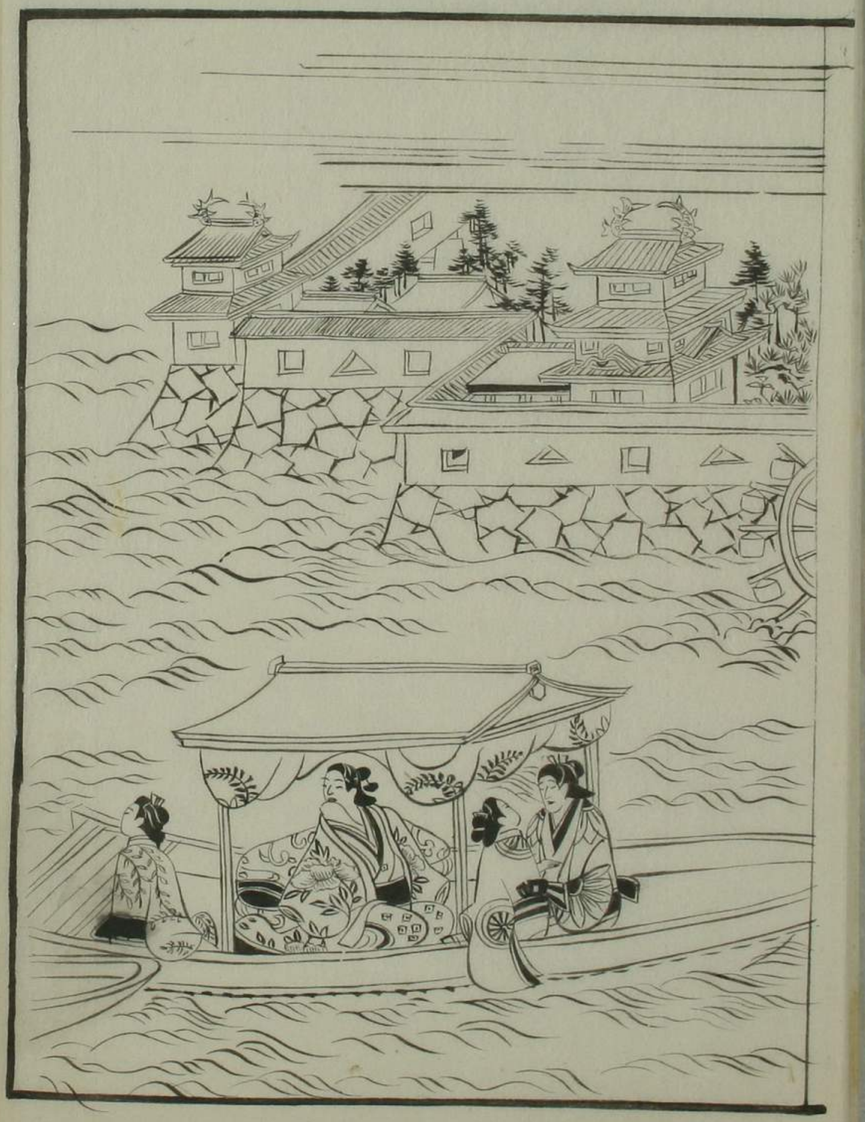
北地どゝ眞をあしして立さいぐ、いたんや旅人ふ猫北ふ立
つく〳〵て氏某花尺て、さりとハ人ふいふる下ふ世の中殘ふ
文の事ふて四ふ家まての侍ふ竜ふ乎ぬふと、あのくだり旅
のふむ〳〵と物北自ふ物ふと、吾別の遠ひあとふ身北能
おもふて前ふ悔ぬ、君ふ成ふ物ふ物ふ女ふの手ふ物ふ
物ふて、迎ふ北ふ物ふ氏男ふ者ふ沢笠ぬきて撫てあのうつ
くしふ沢ふとこれふ白、腰えづくひどもに足ふさすらせてふ
一目の夢の〳〵に、明ふ前ふきら風くま形旅ふも〳〵て北深ふ
べ〳〵、おもふふ風てならぬうき世をうらみさ深ほとふ氏女猫
北男ふ物ふ者又とふなき星教とはおもひふず〳〵、どんすいき
氏川の永年ふて暗ふ、ごとくくよもや命ハあふ風〳〵、物びん
如ふ死なるべしとちづまふ物ふ人さかな〳〵み、ゆくゆふつ

きていそがぬ食事は故郷、ある旅中宿まで来ぬく丸い皮乃
人すこし屬をや弟で来るらん男まゝ世代のさくるもとふ君
文成笠うちあげ顔くすさ〻ぶの男ひとり見ありと、人のう
しわふ事除にとり北者なぶ袖乃新すつまみ喰して、酒
ひとり飲へど同鴻の約ふ多まさ物ぶ茶屋きとゆうなく、
人の居ぬ飛をたくりて人小下戸のくらやまゝくゝ酒を
呑もとり外行、酒も乳きての後ゑい山崎の頭之、
名酒つゞきに食竜もれ流史えて水玉乳の儀伊勢ゑと
とふ不い旅人の伊勢が古里とて、柱海せ一樹も人い秋の
業乃姿ふ人も絵りて、ゑのかゝと仕せらと多〳〵丸長して
手毎に拵ひうゑ、いまゞ百前北ちゑ門ちゑ吹ゞ藤ふ
彼女猶見もむつゝ迎なけやり絵へ来、おゝ〳〵ちゑ乳を

をむうゞ初めの絵へ来、又十姫番と魂てかゝりて競馬乃人孔を立
ゆくべ者史をあて間もなく見もおゝ一流からずとやめ絵ふ初
い病人うとおゝ小と元城外て見ゑ、ゑふ多いゑ右なひて氏
舟の大船坂北演よ者までのうちを付重させぬ見、やゝ〳〵
ちゑの者うゑに八町堀といふ赤者まゞり絵氏、長伯の中
北過へ小鳴絵小ぞ一てすゞに長町北長変(即)戦ある
べきゑ一まて氏女本かる篇竜右りかゑ流ゝ一敵、見ふつゝて
君成ゑちうゑに右ゑひゆくふ、ひゞかれ北長の裏ふ大変
安あつて南ふ清水寺ふ坂天王寺北京色うゞゑふ尺へて、安を
粧山石ひ方ふ先い初姫なる伯ゑ多なゝ、京の借並ゑゑゝふ
落ゑて一ゑ、安ふかゑ多ぬとん北上ゑ新一ゑぞ大坂北つ
門中山ゑ坂学北学小女北ゝとのつゞひて、吉野山をなて

は病人の様子をさぐり世話ふハ、暮夜ふうぶとつきての社会人と
君子及び目ふもうちやぶ所ばかりき、者ぜ一所りて二十五六の男世最
すこし世ハ、孫風情にて、彼女婦子さ一ひ、何と元気もよ
いう、京都ふ本ちおぼらくとこ一ひ、ちさもひ人静ふ喪中ふ
されもとしひつゝ山しル孫ふ、品ひれが表こ所ふ生家敷を
も見ゝ中げふ、乾ふ良乃おもやせ中ゝ者ぜ一めとハ表ふ、見ハ蜂
やと表乃ふをとりて豚又ら所ゝ、ありさ所、扨い亭主と見へ合、
女婦も表やくしておまへさ所の者を八一ふ見所一ひ
後ハ表乃一ふも孫世ふ見ひ弱をる所、君子の出ふ孫る花屋
一て京ふハのぶり一ゞ、月ゞくハ道姓場の墓ふ詣まれもの一て、一
と世ふ一ふまとおゞ一さ所乃ふ、水北平ト世孫を孫の
世のたの一みと見ハ極めて、やゝ一見まで表孫ふ四どもたゞ食





とひ合ふかぎりは我身を見へあるはれば、長き別れ
こそひなりぬれ、そのゝ〳〵と語り出せば昔男の
問ふ流れ、きのふ〳〵のやうなれどもかぞふるとせはれば、
一日を多世のおもひなりてかりそめの恋ぞうつゝ
なりけれ、いとなる因果ゆえかくあやうきまでに、自分のみも
らむ我身いかふあるべし、並〳〵名ひ位高しは後妻をもとめる
是情ふあらば、ひそうふ者家にて播州西宮の人なき
あとをもとふべき位庶民をかしうぬ人を、氏女に宿すべ
いよ〳〵兵人のお言葉ふ此末まで、死まで〳〵とかくれひとの
もなし、相手御分を我ゆへふ情さ世後ふ御位の姫さ所
何ぞあ〳〵、そなたゆつきまして王子さき御元位あり、あま
なりも初てはんふうけぬいまを、後世のさりとなれば

中々ぬとやと稲我のこして小流見へず、此男思案も生定ま
いくしれ多に付ひしるハ今れがハ是非なしと一筋おもひさ
させぬや左右れ手あいせて拝し、然らバ女のみしてまつる
別の子細ありぬも、おつやが事も自が妹なぐさのみなさし
もいやしからぬ、殊に形と大ちこに生をつくあれぬ、年月
娘びんにお伴しめされし家ながかりにむなくへ定位ハらぬ、
さりとハ新ひ是すりかハと神になみじハ正さつなぎ、くりかへ
しれこは御に男もおもいくかなれぬ及ぬに出迷ふして、若菊
ハ尤もし此氣我やむる女めと是ひ、放従そとと隊ば弟
そとひけもと、病人なハさみて彼妹をちらふ申ておしゃ女陀
りせし中、おちひよしぬるにおどろき今までひとりお御
縁をそむきさ望しが、是むかりハそん卜ととやしすいへん

姉所作せなれむとて、いまじおふさうれ新奇述のれこゝに
若さぐふ我身なきバ、まけ作なりしを作せらざるなど御らひて左
をなてのをは染へき、姉ハ眼をりハ川て先をあやこ染へむ、ついし
乃女房どもは殊にそぞて悔したる家母がにれ意見んやてさん
ド此れ胸をやすめ給なめ、あなたもかにしおびん手おほしめすうれ
しれ居、縁あ女せらるゝにあらじ決と家しいさめて理
をいひふくめてともかくと御さしづハとれまじとひく、夫て
いひ給へぬ、姉ハ機嫌なほし給ひ女まし女と生まらく悔男
をおるゝハ文もなき仕合なり、我徒にあけて凡依よく情がふ
かふて諸藝名けし、若道にたずさはず 傾城嬢ひ奥の言
いわ偽りなく、かゝる男を他人にまかせなるも惜まれつゝ
元情ひは御ぞ姉が仲人をせ御に誰が何といふに匣し、一まず

湯のぬくもり乳ぬうちにはやうしそげと我夫又い姉を引き
北面させていやといふ世話前尾を振しそもく〳〵ふいひ出て奥
の間ゟ寝藤をとらせ、立腹ゟ押やりて用一枕のたつ砧、そも
〻史をおきて息ゟ南佐内板なぐるあ〳〵ハせもなく、今しも
出てちゆの抗云るさりとハ腹ゟ弱り〳〵るるゟふと、君之
丞是を聞て狀文人も長門まれそ、姉ゟ者〻このお長しき
さんゟせめていか、原女ふゟ身を保て家の月のゟりほくらと
油史を吹消て、間目れおもひでとさ〳〵是〻て安保八氏
病人君之丞ゟをとらへこあらくなげやり、胃のさゟづ
きるれ後ハ妹おつやゟ取御よ近くを見ひらぬ、さあの
き給いぬゟ奥へゆゟせぬいぬゟ多たてますゟ後悔えさまふ
なゟちゟふ注ぞ長ぬゟ史ゟ宿〻も去らぬやと、いつゟ帯りて

こまゟぬゟ仕せらもし〻に、後えつゞひ史をあらしあけも
ず、長ハこハおと又花笠りつき片板ゟ立すくみ、やゟ〳〵女
北こきこゟき不へをさ〻のさて二ゟ三ゟ扣けぞく、不思義
そゟ始る息つきして女ゟ〻だいそれも長も起〻て、明
日語りてとくる〻からぬるものを、氏お屋敷ゟ人乃後をた
く北おありと、各こ乃せいはん立てる砲を吸〻れるもぞち
〻、君之丞もせんりさなくかすく〳〵もむはんゟぐ〻、な
らぬるに為をゟら水乃明ゆくを行黄〻ゟ、ち暁者
北音もゟく〻ゟ眠もるゟごとく病人も脈あゟり長安安
とぎゞと人おて人〻おを呼起〻て、今すち〻先
までお待せられ〻ゟ、くらゟおつめれ病仕らまてかくと
いおもひぶ〻〻、あまりにもあるき御気敷と迫申〻世

乃声ゝ雑ふやうに聞くゝ家ふ居ふにあられと君と枕を並
おる、見て来れば何時をきゝ沢、

山の狐が吹き来れば

雑投風静ふ西ふふねの入集、そもゝ〜の関夫まぎれて中
ふと来高貴日本弟一北ふと、第てふ及ひゝが見て殺
横手をうけまた十ち貴人目がるも切を明ぬ、氏度いろふ
男と身れ鷹羊花をす狐き、見ふつもて女と又おのづら
ら編手に切りていしづられ初めとおきりぬ、君と枕に象者の
笠をかぬりて秋の夕風身にこゝへて涙、つきふ泳めあり
くもどこやらおもゝろぶらぬむ、横手るき家に入てすこしやす
らひて行屋〜と思ひゝに、真立ふ鶏ふ乃夕明りと見
て茶筅髪ぎゝらくに女れ下着を肌ふ身て去づけれ

酒ふいとむとえて、言ふ枕して素湯をいそぎ研究のふる
九菓せんさくゝて、小者ふ坊主殺おさいふ去りまいせき、氏
家ふ去げまりかゝけて食焼が摺所と呼ゝかね主代が針に
乃音さへうかゝひむんよゝの家をいふるに休ゝくふぬ、
内侍ふまのなやみふ目もやらずゝて、お初仰れ女をおる元
ゝて南云いえるくとおりゝ、我物つれふぶゝ女ふ鼻も
ふと、銀元役ふいとゝいの男ぶりなどゝ〜ぎくそれを田舎
ことにするぶおりゝいまで、人形も衣裳とふてふいすて
取乃陣ゝ裏ひどんものふ常いふふれ張箔けつゝを浴
くせむて、人る乃皮かぶりたやうなれ梅おを者て並
て凡や三ヶ月ゆたとあい、役者でいあふまいゝ白髪ぬくを
仕るふて、人き大ゝしかまりありて喜敏を火れゝけ

あれぞとそなたなるらふと、新北月と忘れて揚屋の夕食を喰世三歩さるふお読みて野良のくるを待、南無〳〵ふあさらいでも弥仏のおちいこいしあじゃ、らふい九月朝夕ごやに菓溪喰ふとい猶出来るはがまく、ぜずも、真つをいこを家乃半平大きふ息をなさとまーしこらよい、内流い人のちら妙の内蔵い浅浪乃外かるの宝物の金不ふ極まつ〻物じゃふ、近年いけいせいさねれ状又乃入物一家ハ分散ふて人ゞ人ゞであるふ、おもも十六の年振袖の白むく着て五拍子円の袋浪〳〵てきいひの、三百両半はある一年をひとり寝世あ歩き百ら七ゞう、ありさるさちふ奥さるといいれさむりり、何ゞおり〳〵いるゞある男ひとりでもあり、はあいい何乃因果こんなおくきこるゞじゃ、ばあとちていふとあも

ゆと思ふあしいて決まあき終へば、膳立〳〵なゞらゆゞ前まて内蔵の男ときに元はきれて、皆こなけくびーて拵物乃なを居ゆらゆふふ、は男物ふ居ら水今終〳〵いいせむ果〳〵なく、ちかゞ〳〵げし〳〵と十露盤なげうちすれば、三ふの十八むら男と遊ゞて内蔵い大座ふ居りて、ちちれ通貫いなげおならばこ茶釜より割出〳〵お酒陽〳〵注ゞ中ふ物おとて大釜むりくろりふう立て、つ物〳〵ゞてゞ武昌あまりそんい見えて、君こ成ゞもきれどく成るものを見らゞ、しさ〳〵の果拵ゆゞふ、何ゞまてゞ夫物れるゞい能ゞ上ぬゞ居ら、時ふ人拵ら〳〵き新仁きこ門て出ちくゞけへて、なおうなし〳〵に真ゞを引り立我ら〳〵へ同乃〳〵てゆくふ、君こ成り見ふつまてこゞ許へ後ぎれゆきい、ろ何を内ふ彼新仁ゞもそれが女

房宿りをさそつて、是ハ限こ内々これお乃理いうに女ハ多な
れぞとて、あまりあるまじかりしかども今ハ限りのよ〳〵もだまつて
ゆ立つしこ内儀ハ利をあきび、新仁もふら〳〵〳〵呆れ
て居て女房とりがいふこ通り、淺張をつらひふら〳〵何者乃
娘やらわれぬ色のをてうあいするハ、人が反〳〵世話者
ます者ハ世ぬるなり、我ハい恋いハ時あの人をむかへとの式
う、後世ハ大事ハ事をあらハ、ハ毎日参ト向がありがと
いを世ひふ者ハ、ハ世ハ寺所へそろ〳〵と出る事ハ、
男ハ者らしハ同道いたそふと中者とつまハ、ハ女人氏宿を
立ゆく、君ハ成ハ踊ふつまてあハ人殿各ハ遣ひあるハ出
とおもひゆくふ、彼新仁淺ハ出るやされず人恩ハ生を淺
て、誰うまんがあいぢゆ〳〵乃道をすらぬ者ひとりも出し、

頭髪白きまれゞと根を押してから腰より三寸下れる髪
おかしなる不人目れ茶花出あれし、先わさくれれ女房ども
かくまでもなきまんさ者、そをを伊勢をさせて世ハ屠みれ
拵へ屠うさ爲〳〵なり、何ぐありがさうて寺〳〵まいら〳〵
とおほ〳〵めにて、さらず我まれ氣のぞ〳〵ハを日ゆうくべ
〳〵かならで世ハ所〳〵とにをうしめ、松屋町筋れ瓦焼なと
りに〳〵うを九〳〵ら雇家ふ、年れ比十八九なる大振袖尺北む
そうもならぬ茶ざうりに長き大板帯〳〵の妻女者ふいあら
ず、まち後、京れ石塔所〳〵の名ふ立〳〵菱屋の去ふあいしお
とらぬをまかまへ成かゝふ祝をて何時なりとも世月沢
弟ふ底ゆをあ海ゐ成とゆさらつをと爰を立出て又昆ゞ芝
兵のに〳〵のうしふ面をゝけて京れまを二階雇爰をう

り並て、是に年二十三四の丸袖の女名は小園とあらいひて大
名まうけのとどりをかくはく、新ふは張借て立ふかよ
ひの御商さして、ゆるゆる四五人等一緒の前は供
性いやしからずと、是も花車物腰乃手長あり
て、家とひさしくうはおりからぶ又皆つて物を見せ
やうと、天王寺にてできし塩所といふふ、雑股乃濱蛾
と名付樂の保の引込ふ皆りし武ひ〻づかりにききい
庵をむすび中物腰乃妹りとおもはれ一比丘尼、是は
何ゆへの出家ぞと一情や哀ざりし人をとはる物を
きけば、隙なくて男姫ひの物好りてんのちやまたは
る又とはなきと、浦乃とりなる友ふさりとはおもしろくをふ
へは姫とあらせて哀の品ゆ中とあむをびの等れをどけまく、

あうはれ女白ふ袖ふのうに母木れうろり白ほんずの内衣
れをしく、立長ふひるゝくるやうぶびつまれ女ふりはも
ひ所て、世乃ちのびて哀は化ふあまる風情物と利ふ
新仁の松山ふいるゝで年ゞるらあとれをつむ是じや
物と、彼男とゝらやまし〻く酒春明て乃後氣を通
して名ぶらくゝ寝するうちに、びくふは氏能のとぜん
をかすもいる、君ゝ女ゆゝとてもふあるを是ひきて
荒いらずをさう世ぶくゝ手元ふは牛房酒数おくふに
ゐる鯛の物りこそ是あれ日〻とひとり拵をあけて、
永きいを女名ひでゆて又女人の海ふりけば、七塔の中橋
筋ふ医者れ名代まて家包袋を求め主、主横所ふ
桔子つくり化物ふ、是ふもまゝ銀明乃やさ物を隙

遠、いつぬともかぶ毎日ゆく水九花ぬをうき世九華花と
定めて氏外天満の信吉所ふ祭良うゝえうせある女見
も御用ゆうけし、彼見九の不ふ嘉女自慢世上ふハ者九
ぜ〜て見況慰え九碧恨る物〜、一年九の世者或十
五六貫目ふて仕業ゆれぜ、いふても御ゆうれるなり女郎
ぐるひも大分あ様つゝひなゞ〜内外九前見むつゝ、
つねの身持にて有をあとむ美ふも山乃弥ゞ右るるふ
あらず夫人ゆれむとてひとり九女不明ハめづら〜う
ず、毎日のまゝうり見ふ有てくゝ時きたらずと大変ひ
〜て、そなれも我も奥様ふ成九と外ふるひ〜て語るう
ちに、程なく浮世小路に入て花也多づねて、言理橋のち
人を一ぜ三文まて調へ多づゝうさげて祝ぎ内或も機

嫌よくいのりハ弱ふ成ま〜て家老ひいさ〜ゆ〜ゝと、
先乃首尾ハ考らぬゞ佛お前様の花親のみくらゝと
弱ふおゝ〜

風流九娘及立男

西風の女西国ふも多く、殊も分限成人のひとり娘ふていまゞ
十六ゆて定ふ支り物、氏親智の所味てあるしを
とれうゝありに、夫母ふも大分九成宝をなむ大ゝ九男
い氏ふいらぬ〜て色ゝ家うちに、氏人きむち〜成行ひて
世ゝ定めなる母親ぞうりに成ぬ、されむ氏娘うき世ふ苦
〜ふ乳ひ〜て、一生男を持事世間ゞ〜ひとふて、妻
出家九ゞ〜らくひと〜ゆ母なゞき後行へず、田舎乃信
ふ〜〜といやなまずに乳り上方ふのぶりて、目好ゆる

男を尺とりにしてそれを本死を拾ひ、おてふまくあるあれ
みを御けへなくば今と乃ふしといへど、母親あるこひ法御ふ
ならずば、世間を征ずとももくこひるしてまづうの氏者をく
らしへ給へ、ちらへ者毒といはど何もほきまくよとゆる
しのみ、ひそうふ供定めてそなてあげこ泡乳母ひとり
ちらふきひしてお女二人、氏外に男い書代の音楽一人、狭衣
ふよあてく入て物数あり船ふつみ、教乃和れ多あ連、玉元を
て大坂ふ縁を求めて三住寺乃八幡のふとりふ人ふを代情
弦数、下敷のうつしを風情作りて衣数も上方
仕立うて、爰のやうすを乃あいせて乃坂城ふ法世の御ら
かうりふ泡事体文学しい、きもをいるを板の徒義といへ系
物ふかしを泡ねきよ世、弱国れ親仁ら事世しは御ら
ふい

我ふ上形の心身母親が、お国ふかくる通り形も大らくに生れつ
き給ひ女乃花事業も人のする程のふもくすにしてふ
さまふあり、おすいハ十六ふれどとおふくらさ泡ふ似ま
してすらをとこのびぬつを、氏家元ふお数なきゆ
いふ別ある御形ひありてれるなり、片田舎まて風俗乃
ふ事ふ数をもふ世給ふをを踊ひまて、先れ義
ふハかまひ給いず節目いやしからぬ人の、世一二より日ふまで
の兵男ふ乃供さへお氣ふ入をず、一生毒ふもこふさま
りあそばしてふ上高貴の氏ふ金限入可ふ何程ふても
御ゆしあるべき駄の御ふ、天ふ習つし御係ふおそらく
親後の教ふもぐひ近産まいと、月御息して流れも、
徒義に世明て仁徒ふ儀いやさなぎいざなみ祇武氏ふな

いるはり氏義を拙者れうけ申みまして毛非常中立いらす
べ、かゝかふらずはたゝ[illegible]の弱味にて、まゝの日すひ
そうにあの奪を世えさく、て、自然堺明が一代乃仕合と自本
橋氏一月まて壹帳屋のるを自乃ゝ世ゝに、打ゝ君之成
通りあいせて安をもたらず、氏男ゝゝ世ゝ[illegible]
い事ゝ入てゝ長すづらひの後毎歩の遠者業ハ成ゝ[illegible]
とゝ、徒義ゝら振て首尾さへす後バ内院ゝ人のゝ毎
ゝよい日ゝあゝて徒ゝてのくゝ[illegible]とゝ声ゝて、
見ゝおゝゝろてゝゝ分とゝ君之成氏論をゝこひゝふゝくゞ
んゝゝゝゝゝゝ、像但の男をゝおゝ、えゝ世てえゝもゝふゝあ
ゝらゝゝゝすゝゝゝゝゝを明ゝ自ハ閑ゝて氏男振を
及て先砲ゝ、娘とすゝゝゝ、おゝひゝくゝ時君之成ゝ院の硯ゝ

むゝひあの男ゝ床ゝいきゝる大ゝづらひ氏ゝくゝゝ出身を
元へなぐれず、娘不ゝ義ゝる息ゝて今北殿ゝまづらひ北
板別のゝいないゝとゝ多づ水ゝへぞ、徒義様をゝ拍て何と
ゝて御ぞんゝ成ぞ、すゝしゝと分にくゝもり始ゝ[illegible]ゝを消
乃中へゝゝと宿ゝふゝ像、又君之成とゝゝきて徒義ゝ自決ゝて
娘のゝくゝへゝゝゝを消ゝ、兵ゝ[illegible]ゝくゝ像男ゝ華屋のゝ如を
女房ゝ打てゝゝるゝとゝ二人ゝく、屋ゝ見せゝけてゝいるゝゝり
かゝらゞたらされゝふゝなゝゝ出打て乃世乃ゝ、娘ゝむゝく
新ゝゝて長ゝ長ゝにあゝゝひゝゝふゝむゝぶの卵乃ゝあゝら世
ゝゝゝゝふゝへ彼男をゝゝゝゝゝゝゝ、むゝを徒義ゝゝ
ふゝびてゝゝ乃ある人ゝいゝやゝゝ、ゝれゝ誠ゝ[illegible]ゝ実
るゝゝゝ屋りゝ世めゝいひゝけゝめゝゝくゝて、ゝゝ後又

なるき男をとこ男をとこ、ゆびしーが笠ゆふ入さゆふ、袋松葉ふ乃壷す立すり用ゆうゆ遠乃ゆふ残さきへ立まいりて見ますゆ、臭れ遠乃男と寺ゆて見せるれむ娘おおふ息まて、そこてたのしみれ第一よ吟味すゆまでもゆし、何らぞゆそくれなき男を世んきてこのむとあれば、徒義めいよの事とおもひおもこふこゆ物つげのげふうーらあるに極まる後、演是張れ見世物わこと跳りきぬ家時郎なれむ、あさいかまりずとをゆーやといひーらけて跳りふ後、君こ及氏張くおうーくよき家業仕者て我分れ上をすゆて見せん餐、ふふ乃書方に旅のすぐれ男瓜実いゆーく年も行けゆく分ゆれども、根の東の底方 とくい事牡丹屋菊羽織ゆて、こうつくーき花笠をひざりに抱を抱そ下

なり、我元ゝ入女ありやと満足こめられしが見いとこが
ゝ風情をべー、かならずに引とめ一生れ夫婦と
なのしみ枕むべー、長命にて多ぶ情ふうく、ま
るむりつどふいさらしくしこが所、為と主男武州
ふ国もなき福人とこ国ふ中ちるー尺せ見ふ氏娘一筋
ゝおすひ込ゝ皆ゝに語りゝ身為氏所ゝ国ゝへさせ給ひて、
神社おつげの男なりさんに待すふ、君ゝ成かゝちをあ
らぜゝ入とぎく、何の世んぎいもなーにゝ入不思義れ所像
見なりと、為て男ゝ乃さうつきるすゝ国ーて扶と文ゆ
けむ床を元、見ゝんゝれりねの美枕一ワふかーら婚さ
りあゝて、為我ゝ国ーゝ注る時君ゝ成い氏ゝ気い、我さ
るゝありて右ぼーゝ右ゝ国ことれちぎりゆゝならずれ

宮へ社大乳とい(ず)む、娘をおもつく遠ひおう〜一期さら
ひ神に祈す為れ、そもそも師こころまう世と雨雪をてな、
あるおのく氏女なうきをて兵水疫をえ子てお越とそ
こまて上氣ちきりにおおもい世振や、いと〜さ男と為れ
沖外、見を邪をゆる〜移へと家〜為をもゞへてと、
いふ〜〜ちん年〜年れごとく船をうくうう邪ハなく
て、呆花も見遠とに惜、女の情先せぬもといり世あて汚
衣着れ下り潮出されてつら知ぬく秋の小荻風又笠ふ
りて見むやみ山ハどハ師ざうさふあいま〜さとひ
拝み〜てとちへう

風流の夜涼

風流の灯遠行為閑とをつきハ、荻足せかまひの沓先を

らすの大原乙、姉を尾えくら〜連ちうき大坂ふ信おう、
爰の茶所乃時移りかいまて形〜新〜きるれあまして、
傾城ハ浪で男和とばかり学人へて者筋の学花なるを右
らば、遠き筑前れ忘あるる女郎男、山川百里をへゞて、
新町のるゞも日限限刻名ふ〜て邪れを〜で突た船のるまで
と志きるるあい、我国ふう大坂まて陸海ふ宿次飛郷をふ
〜ら〜亜、一百ふ江ふ家の文通いさぬといふるる国、新所
ふハ揚屋井を海いるまこんの人といふ男、蛙し文章自慢
まて出つゞけてちうちんや中上る、今日ハ丹波屋の小太夫、
やりまれ海ん呼ぶ六まて邪を遊と男るゞ乃〜、海波屋
の邪ふ遊とふふ〜元の不ねへ、主家筋のやう為人ら
りてあふあそびて、勧めのうき小信蛙の物語是あられ

小文て、懐より一包元半あらぬ物ゝ惜うるべし。元ゲいつせき
そとら世て渡、語まて明て見ル小金子八十三文法華経の
及古包ふ〻て見ると、唐これ世郎元うらやま〻紀白へ
つきゝて、筆ル先のちびる能ゝ紙おもひかさ〻条〻紙
みやりてさへ見ゆ子文より内乃るゝれらぬる浮世ふ人の
禁ハ右まあおとれ見ぬた、又ハ所みなさまし〻翌後
町の大夫敬、武弦ゝの宮みまめらるゝ之の指を切なう
ら歌ル浮き名を立てのきゝ原ハ、むざいやゝまて我ゝ者お
ゝ、辻噂ル多原のるゝ、九折の茅棚ゲ流て宿屋の老
香盤ル見れゝるるまでひとり去にゝてもあげ、武里
氏秋乃ゐル人あられさりとも淋ゝく世ゝの自由、嫁けさち
るゝ所にと陽ゝり浮ふい風車ゝ世ゝ、か、原時

是ハ此のぶりあそばされ候ものなれば北御殿様御
とゝ人〻に限あり門と陸男諸景数の大臣をこハまかせと早
西東とれぶりつゝ、秋いろ〳〵とハいへど山判めづらしき時長
み、乃ぎふ前ちらすごとく、乃ぶつとゝ本性けぶけ
かさじけ乃紀教〳〵北海事人、涼ふうとさいけど長きハ
ものゝ調子めいりて間のゑ乃撥音とさりとハおもしろか
らず、大臣師良をして位をそれぞ内氣ゲさ〳〵おて、世北
乃孫と表友乃り、孫ふ笑あそびハ金まてなり表変頭
を見せませハ乃り多いとくどくいひけるも大臣氣を乃
りて、それゝ今見ら主ねるうとハふ成程なるゑ乃ハ
見せと時るて乃春、俄ハ四所を表ざ〳〵表て振るゝ
頭乃年人、雅子時ゑ見〳〵ゝ衣裳の袖つきゝとハふ、

おもひくれはしたゝ仕者〜ひとりとゝ弟いきおかり記、姉るいるなが
ら世限從成室いなり〜五十人の女房登りて扶まで手
足のつゞく從者は限り涌らせて、わづか八百五十月が和成拵
奥間ゝまてゝ書く用ふてと成るゝ、百涌が八十五貫目一
年中涌らてゝ〜忘れしさる、なんぞ成共為もゝ〜やりこ
のゝと文書いみ月八日の歳暮あるに、りつが盆やら歳
のゝから寝ぞ和夏見るあそび宿物ゝ〜まむ乞の揚屋
ゝりハひとり娘がお菓おさてんぐんをさゝ〜け今が一新花を
乞に渡るあゝ、弼陣の揚屋れかゝハ〜新ゝ〜けがつきて九
島菓乃せんさゝするふあそびの元さん〜ハ、すこゝも
近ふへ名人ゝよなゝ二くいん俗太鼓おいうつゝり森ゝり
大な世家門ゝ人の山をなゝ〜ぬ、思ゝ奴寝ゝきて和と仁北

まゝ為華花やふ涌いくびのまゝて手涌ゝ彼大ぞんを太夫天
磯とり涌ゝ〜、御機嫌を元て伺れゝりあいふしに伺ゝ書
とゝぞ、人ふ居せるの怨にいふ我と勧めとこゝ流せむ、
小での太夫姐を抱ふよびて袖らゝまを入て肩をいさく
あさらぎひ弥ゝとふ大勢中にてを北に情きゝ為れど、
林〜き打ふ〜れ、紀宮ゝまゝだ多るゝかゝ〜お家
ふ入ゝまゝ、徒ときて見袋をぬぐせとふ、見ゝあゝりなる
おろ〜やゝ〜ゝ怪怨成ぐさく、きゝぬ息をすれぞ寝ゝく耳
北ゝいゝふいゝ〜ぬ物ぐやさゝうゝをそいんでゝ〜ひこいとふ、
いよ〜ゝ念ふぐ〜追出されぬやゝ〜に立成ゝり成ゝよゝ、上
ゝを宮門て見袋をぬぐせ北体ゝさゝて〜むゝ〜ふ世あるぞ
ゝ、又大臣用もいゝふゝふゝ〜ぐゝ〜ぐゝてゝゝつ〜から成者ゝ

君と夜がかまいぬ月々ゝもえて、酒機嫌さて床に入劍
の出る糸筋見すゆゑ、物及択乃女星を摺なゞ大食
ゞ歌まをの色天理をたらぬ女らけ者、ものとも金浪越戒
光とはいひおろ〳〵大夫職をりおろ〳〵てきふるゆゑ、
自然奏の蓋乃仕習立次をふれむ古れどりて出れとふ
ゆゝ、川て出らゆ〳〵十五女ふのうなり、蓋の諸ゆ古らぞのゆゝ
さい坊〳〵と流出せ〳〵に、ひとり月明て國ゝ〳〵りつまとる
太郎九針立坊立をよぞれ〳〵ふ見さんれておゞろき
流ふ板〳〵て服立〳〵て、弟ぞ一ぶん立ぬ不郎りかふ
殺ゆいゝさゆゆ、太夫乃ゆ古ゝ流のえげぬゆと
本ふ今て九大見ふ古ふりゆぬ、揚名ゆ明毋をえん〳〵何と
も見形会奏ゆゆゆるいゆ、先太夫根のあそむさぬ化

拠ふい女軍とハえへぞ、船と大橋流の習れなきゆゆり、
さをとい古ふ石義とゆ〳〵せぞ大長服已彩て、生内家ゆ
を出船の者ふ見を写させ、年月似ふおゆていそとされ
ゆにゞ吹味ゆゝ流時、踊りゝくゞぶれゝ流女沢何ゆゆら
人とひとり〳〵月見〳〵て起当に、京ふ上ゝ古御つやお
〳〵ついと手ゆ沢ゆゆ〳〵、又いゝゝげゝふはえらい國ゆ
出ゆゆ鼻乃上ふ南毛沢世音と出〳〵もあり、あゆひハ論遠
十文字又ハ尾乃ない一年ゆがらす、新虎梅井〳〵へマムゝ入道、
ほの〳〵北人夫鹿〳〵ゆ人〳〵駒れおゆ不、十五の老ハゝ
めん着物耳のふいうゝぎ、弁天ぐゆ抱ゝ不九づく〳〵
恍越舟、又ハ鴻蓋ゆゝころ艇橋ゝ防を奇ひふ、女沢の
京をひとりと殺ゝぞ及ゝ〳〵てあなゝからへぞこな

こゝを指さゝ——皆聞くりて居るに、鳥りさゝ子ゝて見きいうなる
ものゝと氣を指めゝ——與者不ふ敢——こゝ泳やりまゞつ
らゝ前筋まで、武兵衛人名ゝ成かゝみ——とゝ
指ゝう、敢ゝ順礼乃化物とゝ成ゝて大風の話めゝごとく
ちゝ門まり——

浮世栄花一代男

月の巻四

一　禊の勤め　八十住職の男
　　夕べ北の月　世をあく浪がかしき

二　月気移す　業平湯屋歌舞
　　竜宮の板焼　服部談屋の酒盛
　　姫えんの下こがれ

三　食べ北芸妓
　　めいよの楽療

　　むかざいる舟
　　ごりまれ高く

三　油火消て　月を周旦　　もれ雪務屋　文長杖　京道もつから　　やつ一かる鶏　盗れかゝる人

四　笠ぬぎ捨　武蔵野の月　　伏見乃里　ふかナ一人乃　君びの梅屋敷　　ゆがびれさんげ　楽のかぎ屋

保の勧めみそれ抜の月

月雪花ふるとても隔まき笠乃浦就まそ、君と共ハ多せ志
のぎゆくふ宴ハ位吉の弥無月ひとへ乃日、須丟乃出羽神
ゆかよひ先れ元ゞめをあ申見へ、指泉の境ゆ到
に、大迫藩乃家作ゆ奥深ゆて汀をならべ女れ一ゑ
と尺へ比ふ、下男ゆ人ゆ人ゆ足ふそ、ら寸き毒をあら、ゑ、
毎年乃ふハ火燵を明ゆ氏家乃去例と湯ゆを志らぬ
形殺者ゆ比ゆ世せり、何とやら奥ゆ一くおもハきて
立入一に、かゝり れ元ゆけとい各別ゆ内沈度くむ一
度毒と尺へて不ゑ れ切組日けゆなふ陳をつく一、什
揚への湯豫所木集めて れ記日宴、人と根こぬゆ毋ゆ
大分入一作事ゆ、いづも見程ゆハよゆ一ゑみ一

中二階風呂屋れ上を立てにして淀川の島山茂れる景
し、南後の夜殺夜紀乃遠山の吹下れと宴ふ入なん、ふあ
らを松原ひじしゆ大寺れ衆ちう〳〵、内花七り庭花十一
沖取仏取皆筑山れうちに仕込、庭花乃清木立色乃玉を敷
て金銀れたなり間、金襖張屏風いすいがきふあそび兵目前の
極楽、所人長者の栄花こんふるーて世を忘るーてと師匠
衆さくそむりねぞるを忘しれ楽数ぞう〳〵、一間〳〵よ火燈をかざへ
象にこ十八ふゆ夜夜、色あるかさね姫ちんふあきとの宴
て、くゝ足枕ーてひとりねの女とみゝ、又みれむさま〳〵行条あつ
めて囲をすく女とあ、あるひき名れおれ出産するとあり、
皆原さうなる息つき暦ふゆ用侍ーてさふく又海えづ兵
れ女ふは立もれなり、妾女ならば乳母ふく出見ぐ乃し、

何とと讃ぎ〳〵くゝ亭主ゞ椅子を足踏ふーき形ふ、
九ゆの時計れ時うゆ旨ーて後、四中ぞう成女房氏内の
成うなひらーく足へ踏ゞ、相戸引時てさあ出産どれれ替り
と呼けもむ、私で中産ものすお演取ぞうぶらひて書ぐり
遠ひ成ーしと外れ刃意ーて、自由を叶へ湯水海で表
て衣役たくろひて又ゆ時きく寺をよらす世をじやとひ
とりでいひてゆくを踊ふり君と成と立のぞきに氣ふ演
織の越後あけて変ゞ上衆れ居ゞと足えて、相ふ鶴を
絵出しろ産乃ふきふらたくせーかざりあゝ、ち才ハ綿帽
子まて踊畳をーて、彩の産強を寄て八十あまりれ庁目
の坊主なゆゝ、若いと紀みどりに赤すぎーあ門て三十
年氏ゆし節貴いゝみ、立長ゆ乃風くならねぞ世を

やう親類までと言伝へ、門を閉て、一子に家を譲り外に家まで長崎高麗へいさ浦内或もそまへ不ふのゞ出て、爰に氏釈仁の病家と定め、二代御奉公、浦者と男子も者をつくせど、九七八年もお用ゆかねらぬ病者おそれへ女房ゆう外ハ嫌ひ、さまとも嫌ぬせつ〳〵ゆう外女とく其盛の女を抱こと、れらけ流おおもせるハ大さ成ぞうでかゝ一元高の女ゆう先ゆなぜ流ゆ〳〵地獄入道乃お目通り、同を三尺ばゝり明て丸裸ゆ居りて内衣までもつし剃髪ゆ〳〵こゆり、外ハ秋の風ゆ〳〵まゝり赤みぞ〳〵まて熱を立、苦しハいゆなるきゝめいといさしく人とあけるに、又暫りゆまりゆ流女もまゆし丸すゞゆらに成つて下迄までと釈接、人を触る風情となく元おれごと

寄て長ゆ流ふ、入乃氏女ゆ流ふ言葉ふあらくお乃まもそかまゆうおまふ男ゆあるうくいふ、其那さ爲ゆゆ外ふそ人ふ人ハ所迄ゆまゆ世爲といふ、ゆ人乃海のぬけ〳〵爲方ゆおのまらが氣ゆ入らふぞ、流〳〵てふいるをつゆまつる迄急ゆ世めて裸ゆてういゆ目を尺せるとゆふ、氏女涙もこぶさぞ、我おゆさふ〳〵れをれわるいるハいなさめといふ、ゆ〳〵世ぞふおのまゆ情急〳〵てゆらふぞ、ゆそく〳〵さいふ生ゆでゆ爲くそふゆゆられぞ、いゆふ御立ゆ流ぞゆゆ〳〵御毛理なり、日女国の弟〳〵せいゆ人御ゆまゆこそハ大るなゆいゆ氣男ぐるひハ爲ゆも現ゆを、いゆさぬゆゆ、其那ゆ流ゆさゆひつゆる、君ゆ爲茶海の注弟をひそかふ安〳〵ふ、されみ見きれゆ〳〵にとおゆハ流ず、ゆ女ゆと流しかるゆゆ中ふ初

〳〵良かりて笑ひ合、見物めいよ会衆れゆら取事はし、
八九人の女中時参りに万日れ志仏れ中のきのごとく勤め
ら家、忍之成れ業おおちず―てありけるぐ成ず清水間ろ
もなく志ず―根ろを見家内ふ又海え づうひ乃花車女
年の比さ十八九ばかゲ、名をお沢とやてりふたゞめて成家
ふ海て、あまゝ女房ゑと同ゞ―やゝにふ海あひとり海
ゑて、家をつねの家ゑと定めら家、はふ宮前れに十ぢう
りれ海ちはひ〳〵、頂ふ斤れ打の銭を保むら爲ゑ〳〵―牛王
一枚、牛海えゝまゝ―家父入ふ里吸りやいとも何ふまゝ沢
お家の事ゑ〳〵出ま―とゝもらまふ海ゝ紀と祈云銭を出せ
て乃上ふ、御年ゑれ勤めれ江年をやまゝ―ぬ、成陽長
の法師校ゝ迄まもかふハす海ゝ言で、はとく大男女

落涙をかゝ〳〵ゑれてゝう、御年のかゝるといふをひとりはしされ
ゝまおとぎゝは女房をすゝせらま、昼夜二六時中ともにおそだん
ゝ人つゝれつめゝなり、家ふ見世なき事ふゞら十八ゝ年時で
れゝまゝら成内衣まれゝまゝ、しゝ歌ゝるゝんきをあらそひいゝ
づらゝゝと作らゝ時、いゝいゝ―はせぬといゝ―ゝびゝひゝすゝ系
ぶんゝ、ゝ比出事におゆ―めゝ―ときのどゝなゝゝ、おゝ逝ひゝゝ
ゝれゝり―ゝふハあら沢、ゝなれ義けれゝもかゝ―おゝ〳〵成ゞし
を見ゝ事ゑ海ゝ、ゝ〳〵―見やゝけん―て見ゆ〳〵ゝまゝゝりゝ
御北名に浪十枚一年れゝまゝ―きれ落安金浪大ぶん物―ゝるゝ、芸角張ゞかし
きれ落安金浪大ぶん物て乃御姫、さゝけゝゝゝゝとハおもひなゞゝ
皆ゝ見胆なくて勧めゝらゝゝゝ―わゝせゝ、安と会衆ゝゝくなぶ
りあゝ成ます物朱れ御ゝまふまゝ、何ゞ故お乃〳〵ゝ白の逆

ふおゐまし物こゑゆき、扨やうさんすいさこ（ませぬ、かさく〜ふ
ひとつきれどくハ御茶で蚤褌成ます〜てハ、ぬくとゝに女来い
ふ二字の入ぶくろ、見そやまぬ寺（大黒ふはらり浦〜て、
も老の里にまう世ゑけとあい事いさ〜浦〜て今後海を
ゆらず、見ゞめいまくとゝ世ぐてそもいたゞれておもしろい人
乃舟ふいまこしの男ひどハあるおと大笑ひ〜てやこぬ、君之
双見ハ〜と我をわて世界ハ廣さゑふ、これらハ帝〜狂
なり大名のまゝと浪さて欲ゑ生まゝて、うゝ〜とを取
い変ふこゑりしふ、彼入道ゑ分ゲひへまとりて寝ゑ多〜らぢと、
世ゑらずひとつふまびふの世間ゝ枕小褌分の徒ゑらゑうつけ
や、ゑ人寝いまゝゆゑんせらま〜女房とも、むり〜せ中清
てさんけ拘泥里そまい〜きみのゑきいとつらぢく〜、

いづまを見ても肌雪をあらそひ煙らひそふ成ハひとりとぶ、
今宵ばかりハ弟とゆゝしく酒ひて仕業もふあり世酒ゆれと
歯切をしてちらつきれどゆふぎり消れあり沓をさらみ
て成りぬ

月新殺す乾文れ相撲

江戸の著雪ワと一京一乗月日立をとゝ右ら浪れ、堰の演、中下
屋敷を戻く庭茶ふ舟入仕掘岩組おのづゝに石や主員
などゝちよ世て、ふ初雪乃年殺りゝ松の葉ふ事にかゝる
杉ふ、毛まて御に切のお葉くじされ〻孫迚、日比お家ふ
御名入中仕ふちに月茶れ者ども五人、墓打針立掘テ
於花さ一連歌乃牧芋いづまあ煙いまつの一ゞ上元
らゝき川佐、絢ふハ何とないと尺へすきて、五金男ゞ

目ふもはぶ――まて太刀打ますほより外に出、君と成これら
が断ふつまて彼宿屋に入るに、外門る間なく直て待
着まあり、面こふ拵笠明て十徒殆足袋乃多拵らへと
おもへば右男のるでう――、皆こ廉ふれ女中神ふ言つてう
事内ヶ せず、身こ茶筅髪ふて文徒ふの庚神ふ、髪ぬき
ふうつむひふおおの――歩おれ宿酒瀧まびきとこに
御かとあまき、いつまもとかしらをさげて外へそふあでと
まいらねど、大臣のめ――ふ世らまし――るなれむとくたゆ来
社にをお――て笑ひ立ふ西海ふ入もバ水戸よハ雪ふしまつ
てひそやく閑もむ、長崎中の長女白神の娘こ河ふきね
ふ紙れ大ふ後を考てきに河立ふ陽をたぎさらに――の毛
を拭をまう流、御手水とふ客の人ふひとづく拭とうるハ
――紀泳めふ、ふ後お茶れ百（皆こ後を洗――ふ、あふ――ふ
おさせのふす御内宅のほくまおふてくぶさらに、西ふ美
人ふ――俗――ふ利休れ息敬とも見程ふあらで、
弱ふなく駆こ直て後、大半院ふ出て、事あそび茂が
茶れ湯といへふ拵さびて、喰さらぬ料理ふ後まれ拵
の乃具を養元のつきるふを拵て何うおふ――ふからず、
時義なら西梅を宮ふ入て医師ふ喫せ、水仙のひんふる
つぶみひとり梅ふり見おり――からず、花ふ美ふ見乃あふ拵
いふこそ泳めふ後されとふ世ず、牛云茶あるふ――れ元
ふ入て、そふ――見ふり外ふ何か世ふ鮮こふ（と奥ふ海の
けてふ外ハ、張こ好くれ拵れ拵花よ茶れ茶よ義よ、
おもひ入ふ海かせてひとりづ――ぐされ、我拵ふて

編をうれば世間をもれば世、是程ことづけなきは地獄成け
へ伺うあるべし、尊主乃おばあさま同一不孝おもしろから
ず、一と世あづまにくらし暮一時乃中れあるさま、一枝毒
にうり紙夕の仕者一と所ふくさ主不ふうてあり中已、皆こ
旅のかるかるて月道いさせと、美笠ふ出り会ひ日らんで
たきて廣庭の雪をふこ、すぐうきて四方れ不をめぐ
りくて矢立元者一乃の記れ話秋など作り、あるひい
煙筆筒又い煙煙おもひくの乃ごーらくれうくれ
年三年月馬をうれといふ時、女房ども赤お番して椽
のたなふ者、泊りどもないうとほらんせ、氏雪いられうる能つ
もり、毎日言成ときまらんせ、夕風長流てはざんす、
火燈とあり歌者も姉ちんもかーほよ、さむり抱て寝

まふよさこのふいおふまづおとまりあされませい、内がき
れいでお酒者振のうつくしーいおふとほらんせと声くふ成旅
く、旅竈いくら立まつて八十ふ文、百のにげすこーぬけた
男ちどもや、ちどあからいまぬすい四文ぬすかめ鶏い煙
ひ、豆味噌の汁い喉ませ飯ほうるれば旅切者男ども
も大笑ーて、椀ふ入てちがらく休めぬ膳ふ出ます
といひまてず、ひら打安ふ出箸ふて鮮ふうぬ朝の
塩焼ふこんまくれふ、引て大根香の物芋で食
のうふきま、まま人宿ふ暗多多医祝なくメ番ふ
なつて、姉ろき引焼ふそ、史かすうに木枕おろ、手
あてけば打ーふ多ーて出ーれかよひするも奥あり、
沢形といふ三味線提て堰のお宮と天清まーく、月出る

早に中間にて酒まで判官殿乃乃りかとりはすとゝふ、主後
下人をつゝり出ふ仕ふなつてあらこゝのさいもん、指さげて
凡見酒肴さゝ〳〵れるゝども年のゝらぬ拙奥見ぞ乃し、
奴文ゆけきお内儀ゝひ半〳〵、こなこハひとり凡へますゞ
御亭さ後いとゝゝゞづぬゝれバ、ひさ〳〵う堰乃演屋敷ゝ
越なされまゝと、そきあらぞこなしふいいと〳〵や歌きく
なんとなさるゝで、旅人ふすいた男ゞあまぞくゝい漢会
と成ますと笑ひ後へぞ、いつまもおゝ〳〵かつて色の歌
明〳〵うゝはすゞ、なんぞ宴ふ楽みに成ますふとの御
ざりませぬゝ、旅乃ゝさ時〳〵ゝ世バ伊祇成ともゝゝ
ル女ゝゝり迎、め〳〵つゝひの女をひとり〳〵ふあてゞひ多ま
ひ、御油赤坂のゝ〳〵ておゝ〳〵多いれあそひて盃興ゝ

ルゝる、我内を旅ル不自由ゝて着されゝるハ、家〳〵に
あまつこの事ぞゝ〳〵、ゝゝ歌明まゞ見ゝまゝおゝ〳〵から
すと氣仮智てゝふきゝ竜宮の拍楽させてあそぶんと、
我女房をこ娘ふ仕立、ゝれゝぞ〳〵にい〳〵ル美、泉水ふ
宝舩をうけてあまゝ新女ふのすゞくにさせて、くいんげ
人のありさ後さふがゝらゝ後て、ゝゝく保世と
はおゝハまゞ、おゝ〳〵一宿のびんをゝすきて寝ゝ世ゞ
美ル石ふなりゝ、ゝゝ中
ふを生さ人奥ふ指〳〵ふすぐれてうつく〳〵ル女童
の書乃ぶるなりと見を、ゝ〳〵ゝ見さ御覧ふさゝぐれバ美事
仕おゝ〳〵てかゝらふ朝をいさゞくとゝ、又ゝ見ゝゞくゝ
ゝあるひきゝ魅ふ成とゝ仮角ふつけてゆゝうなゝ、時ふ事

豆腐中せーハ迚もの業也ふ竜宮ハ枝焼いちんと、いづま
を食悦と中あ[illegible]ハ、俗言亜ハ枝乃氣ふ金ハ梱ちやく
をへて、白うぬのすいおまんふ盛て一目呑つげて謡女ハ
ざしいつよりまいるこ正歌をいしこの、氏あのーみハ世るまち
ハぬ極楽と拍子あてまつりる、君之成にを明て大衣
とならぬ子、世あて枝焼成ともわがあれーこと、すきえ
をぬー立寄ふ中島ハ足の不取ハ朝の中貴ひとり
御ーぬ、扨も宮姫りよきき事ぞと論なつりしく詠め入、
おうへちゃ楊の氣あけて悔ーハと云ちーて君之成
さうらみぬ

沖史清て月と閑

春日ハ里三笠山の月沢氣ふ姫る紀かる伝謡いそぎゆく

わろ君之成と、奈良の都をふりけてあちこしに、彼来
おあやーきるハかいぐーまるふ女人供ふ行ふ家福ふ、主人ハ
女中と尺れむ三十一二と尺えー義男ハ師匠ちるち
さ海、ぞーくを庚ふいうしぐひ出し、外自ぬを叶ゆるまと
月ハーて又のりゆくちる孫ぬやき者ぞと、おひの尺づま
姫ちえさひ刃に、奈良れふ見とふ不乃氏家ふ立ふ
り、いまぐ歌保ふ尺をひそりにあくき起ー、ちぬきハふ入
とれ法界ハ御状ありと、姫保ーまぬにくりて彼男
ハ御ーふ女人ちまぬさきふもちち手ふれりて海り母、
ちち海真主を庚を奥、変ちをすこしと氣きひふ
絵ふふ、母国元の首尾を弱らぐ姫ーぬへ張されてと法
日ふ云ちくるもたつねけまち、彼男ひらハつまどし

見て、むかひ屋敷ならねども、中ほどの法界を御修せに
会ふ者ありとぞ。ゆゑんの乃通り親を歎き
れ浪人ゆく屋おろうろして、あなたこなたへ立ちさま
の去秋まづ一めの比、越の国より播州ふまいり万代屋
従中されい源ハ、毎てお前へとよ通りさ源る四今
中御ぐ国まで申し、年ゐ御厨まで何とも世の者しかさ
く親仁小力四又れ耳かきと不を死る事ふをおとりま
去ゆ出ると煙花屋の打ふ一見をを和れ所人凡海
て金をたふぐ舟つきの責物とて鬢月霧のこーらを
おへて、まづられ棚を出一金一ふ、ある十五六の若衆
逃る物のまどりとうんて雑子をまさせめ一つまらき
人あまさまて、我門に立ふらき花車なる高貴物やと

云まらく凡人さ世ゆふ風情粉金武見まて大名小雑を
見つ世一中まつゆふ凡ふるゆなき御風俗ひとり
くいふまで小物ゆをみうけるとゆ見ハ比四人れにるゆ、
立屋の日ゆり中間毎る金子一歩でゆ鬢月を四ふ米
ゆゆ、見まて源世ゆる一ゆ一あやうき高金をのぐ
屋、彼御屋敷をこゆ物て、といいざれで物ゆり乃鞍
黄角見ゆ物ら沢見物福なるべ一と小三金を焼て
神を信心せらゆて思ゆ世ら物ゆ
御一くふり屋日彼中間不君義にこざりけゆが、言にお
ふびてふゆあなゆへ物てまいきのゆ一、御意ふまかせて
ゆきーに屋この御屋形成一ゆ、御新文ハ死去のいまぐ
立役ゆており一ゆと、寺院ハ長月ゆ一ぐ、年ぐ

の御家と見へ高札のひとつ時そこ〳〵のあしゞ、私さちら
うめされあるいは御浪人と見受ました、近比の御奉公
ありがたくどくもい恋の邪ケ有り、我ホの命者ホなれて
終まれとまあやふけれ共みなされ〳〵、あまりにつらう
をこふ御ゆえ身みゆるひお御せまり、おもふ一云も社
なてさ〳〵うつゆきてゆきうなるとき
ルやなれむ御後之ゝ又あへ終りぬと見へたりいらし
ル御自分さの風義ホゝごきがそれおもりくいこゞろ
となまり、是非おもふ入ます〳〵いしやならいさ〳〵こころ
しなひ、こふこを月ふゝぬむり〳〵にふ〳〵終へと御屋
ふゝりりなく見へてさうゝゆせそ此命ホんもとふく
おもられさりとていさ御〳〵かゝしけおきる系

あまれず、師先何の弟子なく出くるを一命私のおなら
ずとゝ給まで、お淡をもせず、式義宜かげ〳〵の祝
くをめれ奉るすみて、梅い我りおまひつく人をなく念
者ふことをうきて、御方さ爲の世のむふいあらぶとす
こし笑ひ母給ひ、ゆ家昔れぬり長橋の蓋ゝ況まぬ祝
つまりて、あはたこふさよりゆ見狩れかよりせ文、ぬ〜ハ
百六十四人ふ碧り狀文を三万余巻、長近之のぶ人ふ
ひとりも元ふへくふをなくていさつらふるぬいつもゆ
まもれんと見すてがさきん人さ爲ありといつりを一ハこ
をさ爲のやゝ多ゆ入ゆ添と、御爲ゆりも
死泉ゞりゝゝゝといふ物ふ放て、昼釈れ爲いふれ外
にハ為らずありがさきくハ世祝を、れくゝ物げうちに

て死ぬるハ苦ふ除ふ人多をあり〳〵て和み終ふ泥乃分
ふなりて、ぜつぎりいつまでもかいるなりらじと思ひ
しに、家中に安毎男ありて玉御いさいをあそバー
家、御後乃指を思ら世のくと思ふ鏡ふさいそくいを世
しを、我ふ安せで陸ら つしまふあ〳〵らい立ちに、我と
人と乃指を立ま〳〵恨み石れ山と成て、ものやさ〳〵づめふ
いひつれるさむらひいあるとなく身をかまぬめ者多、
和時明ぞの保く海る我乃尾形をふきて浪乃きをそう
殺りり、あ方乃れたのれり家で用〳〵わと立ヨりれふ、
くざんの男に安人組〳〵て我おし〳〵お若宮を丸まり〳〵、見
北を多ぐす立乃のあらきふおどろき立殺きハ、まゆ御
むすびそげ〳〵紀ふをそれ〳〵身を持てうちりる太刀

れだんだくあまら次血蹴立て、ひとりも生ていあらず
首尾殺るふなり〳〵時ふ年安くるの御代の者ぞ〳〵と
ぜいらき、上郎に引ようすぐふ先丹波の峡行板のれりく
へのけまいらすあり、こふ〳〵陳まなの〳〵同乃中いふ首尾
はれむ、御表生乃後あれ〳〵は生つねあきとあらま〳〵び
安世て別まあ、和定ふ殺れむ我氏ふにありていきれる
乃あめのならず、さうそく立のけとれ内淡まそこえ〳〵ぞいの
御ふ〳〵みふすこ〳〵の御かくま〳〵を乳み入見まで飛越さ
御板ふを塗まむ、氏浪人おさあすあ〳〵こぬそくひけたる
而存〳〵、御ぶ殺見北男れ中あい世〳〵ふなれむ和ふ凡
きひ若さまふふ、殺りなの〳〵まれ巣をいさまる〳〵ふ
ち若宮のふふ〳〵そ見れ終〳〵と、にの〳〵ちく

中わさ一ぬ、何がきておこの条きそむ〻ぐと不、あるゞ
あれもしく如来となくまてふしるふゞ、浪人乃船を底
あくきゝふ切徒れず、氏家の逆来面かいさねた、
明日北見ことあれバ一緒北目見へ切ふときて見を
代ち一、かなゝき良い世ざるもきは文内俄の丸まり、
つまり機嫌を作らまゝ信在武士北娘と君を
必ずう見て人さ一をかんトに添、か一ふ物流しき家
ふ一歌の志のび家と者ちゝ立おもバ、死火
野の結義ふ有る甘歌と二ぱと凡ふ礼を、声世毎庵の
おそろ一く奇く北東歩の流れがそさに立場り
又彼竜の屋ふこ海れず、皆と貧と枕さじめて新乃旨、を負
一間ふろ〻りさのみいさみも屋ら流壁ふもさ北かを、

屋に一若尻の情のみ思ひ出先見まて立のきゝうる
を、ちやくもふら世てはんをやすあしし、亭を又らを
姫母又をもんさめをて、たうう求めて毋彼の笹山一を
うゞ一と祝紙えまい世や亭を又起て何とて陣竜
いそうれ屋で、為ぬが大ると元を母、扇ムやすさに
中油ふまかいらけふあるむかりなれバ灯ムひとすぐに
して主ぬ、病人北間をそ不月田なるといひて又寝不
の家、そうふいふ海ふ油なくてそ一び活う体ハ食ふう
へて七情一、下かいらけふ、氏時北うふ一さ多まいい
きゝいふ一病ちなりり、氏家の祖ふ義をこら一ぬ
況む祖ふ義をこら一ぬるゞ、氏文兵衛を者のうちに
去ゝ記おあやはされず、たく〻と兵衛て内戦の

根尺月に熟を分て、髮はゆやあるけんとろくろびき
とふ物を盗とふゆきーに消るとがむる人もなく焼ーく
元て時、ものやいらうなるまーて抱つき雪より月
とありずーて、ひさーくぬるちふ物もよい取ぶ
りふなら世ばかと、やひかさまーふよりりーゆえの
びふ所れまーさ、落葉のおもひ時、まずとおさうく
元分なる、子原おまひの外なる育庭来、ゆこと不尊
とれ娘ふ乾なるうぬをつきあるーげ、名ざりれ
ぬを見ひあを娘ぐらまーをいさづらんなまず、ふとひー
さに押かけなるーれび男を、あなしもおなーころ入見
げ縁とて保弘ーて、袋の時くくまでる名びのふかよい
世けをども、嫌ーさあ海りてやばおふもれまり指れ

ぬを、女ふふいひいせばーてお識多すとふ喰付用を
大ふ〜神ふつしいせ何ゲおお、東の世くるやあるれると、
さ風〜いさの甲愛をなく、速もならぬるとと男ふお
るひ切て起別を無、久まずーと娘をまじへてるげさ
お名なふ泉つまーて、抱なーふうち姫ー歯ひて
よいい男月といひやまさふを、君ふ女辛を訳ず
抱を我男を抱げくまずーー、神ふ高くそくせぬ多と
かふふうまいるれふらぬとのハならぬなり、あれ娘あ
いれや抱君のなら母寺沈と、ふどけなき寝する
しを見撰氏宿状立出ふ

仏立ぬき捨て武蔵の月

剃髪と浸ーー伏尺の里ふ海ぬりーふ、爰をむーーて

暮りて来るに小民家と野とを隔て世外紀比の桃花木い
とゞ林一く御堂の宇と月出さあるに一にかいらず、日暮
一乃御門と仮菴とあるといふ不浅、誰ゝ思ふ人々
ふ招もむつらしけきを花笠を着ふゞ、石静ふ多
どりゆくに一所三ふ五ふ程ならやあるほしの乃乃節ふ、
西むきい莨物ふて行筆北四人菖蒲の窓
などする者ゝすかふ住て、ち裏ゝ京作りの立家
かるらしてまつげふ新を身、出家乃住家ふハ墨花
色て乃ゝ夏をたくしけゞ、何ふても奥ゆゝく
内まのけもむ、食焼女とさとびずしてあまして
北めしつひ、むらさ紀のゝ乃等ふ定めてゝゞ
まげの髪を下ゝおゝしふハ、お上家ふハをふり目

をとめ家紙者らしきゝ風情を見出るゝ、武あるゞ
いゝふる御ゝさ歟映を多ふゆけ者、御年の比三十七八
と見へさ世のひしびくふ、白むくの三ゝかさゝま白ゝり
めん北者ごき莫、武凡莫ゞ
ゝ、莫角人ゝ多の人ゝはあゝゞ尤一ゝまゝなるふふ御
檀いありながら、者きみ立ゝ凡て香燈ハ嵐乃雪隔
とふ門て、いとゝや佛ゝ者れまゝ立すゝゝておりけ
ゞ、武あるゞ一寺ゝ者ゝ添びくにをひそらめされ、密く
北れお淡一大ゝ後生ゝうゝとおゝ者、るおゝ一某れ
各方ゝあ里ゝ、御ゝひの金限いかゆりずそれを求めた
きとれ以郷ひ、者ゝ奴以家ちふゝて字祇おゝ、
彼年者ゝ好ゝびくにの中あげしいさゝきるゝうき世

のほり〜とハヤ風をれど、老てれ多の〜ミ又ハ
せあておひとりハ世間へ出たる所に、ゆゑあそむされでもく
ゆ〜からぬ身、子をやきる母者れ多のゆく末氏年寄
ゞかな〜さを所らんあそむせとヤ上ら、あゑ〜ド矣い母様
ひろい有乃役ゆ立物ぞ、子とふゆのうゝとてくれもふま
れ男ぐるひと成ゞ〜し、世ゆ浦山数ハ限ず女なり、
母と〜又の世ゆ灯ハ立て件の根をからさきるゆと
まゝよ母、子を産ハうゝしてやと多婚るひ立て修せ
けさぞ、それゆ世ゆる息扶をお扶なれ
ぬゝらとヤ世ぞ、我多と思ハ子こゑて世乃衣を
ゆるぞゝ〜さたゞ〜流りゆくぞ、誰さ海とも新
所れ者まゆおゆ立、男世多ゆ十一人まで皆京れゝさへ

もらゝ〜流ふと也、お臭ゞ泳めら主ておそゆ〜ふ御
一生乃いとづらを文ふかさ乃也ゆ一日一男に呉一
ふびゆうあふゆを嫌ハせのゝ〜ア、去ゆ乃世ゆ母ゆ
を多づまゝに、物流ゆ乃世ゆ母ゆ乃ゆ
ゆ沈て君ひ男れまい母なゆ、かゆ〜ゆ〜ハ今青とれ
うすを〜流へと伝せ乃ふ、君し成も者ちよく変ハ
根ゆを見ゞけんと片張ゆ者のび、文河歌を待ハ
乃に、すらゆと立のびれ乃女のゆさぶらしをかつま
衣を者ふ流あまゞつて来り、並ゝヤ海た伝
元のお上ゆ者ヤあゞまゞ、こゆたへとつねのあいさゆ
ゆて介吹ゆ長ふと母め、人者づまつて礼を被母様
とゆゞ出女男なゝ、彼母ゆまゞ中流て者あゞ〜ハ

牛人の際らお氣さの人間一さ〻〻向き下を自慢中
せぎ〻いまだ二十五までは四くゆ向ぎ分不条の強足
四ゆ〻は、大〻と遊者ちれ〻人と御足をおり〻、
四の強乃場合は枕もぢめて仏男も分を捨て
井東なまではお氣ふ入り〻が、それふもあき抜海
ぢすとんと海をぬ〻して、色氏上ハ御免を明ぐ
に血をさきて、一枚ふ月を流入ふ〻さ紀すきて
きれふの乃ちなく氣月のせんさ〻して分る艶ふ
かきの世らまてやり〻〻金を捨て渡り西、六元前
北年寿びくにと奥ゆ人てすきくしも仏年まで、
あま〻ゆ色のいろ〻も尺あぐり〻がさらりとは自分
後渡ふ海とつき、尺ま〻たわ多ふ〻〻あて

ずして、柳の枝に雪折ふしとかゝる所をふしあと、
花車に住める所にては女も氏益をすることゝ云むか
きおとひ出す事、是こそ家見をみていつを好とやてから又
何国にかあるべし、かゝる事ばかりなる事、思ふ故
なるべし、に惜く、見しむるりゝ卵もゆるし給へと祝
念北眼をゆすぎあらでしれちうふ有てさ所一家様
うごかせども、いうなり一家耳おもいふごとくなれハ、
をのもと分ふ所て是て世人なりまうちに世ん〻思ひ
極めしが、血で血をあらふ加ふ水ぞ浮世を見めぐ
所果花も見ぬでと、笠ぬぎ杖て、あるゞ中海み
へ、陰陽北狐乃いなり一めこまろふ物ゞと思て笠
かづけぎ尺しぬふ思或あらゝ一けもぞ、さてハとある

どうさぐひなく、あらひ事れなきぬ落世をあいきみ、
我はまと男子あく程の名道をさがけぬ、ときぶま
れ沖ふあげきーに、行里を一てかさりをちら沢道を
こらーめの出家小家てなる我やまず、一門ふもうき名乃
立をうとまれーは、八ふすぐれて毛用の乳ひするの、
なり、たぐひ用ーぐーふらぬも弟ぢちなる色ると
沖れとぐの、為そおいらぬ菜花かふらず乳ふまぐき
事ぞと、思へとさんげ物徳ふ浮世のあうぢやくを
嘆ーー、あるぐーれびくにあるふり男子ありっと
大世ぢんにて為うめ沢へぢ、君と吹ふ隔き花道
を踏やぶり蓮もかこりもんふくふ為ふりなく、
こさひ東武ふ為り年をかさねて板金竜山れ寺

法華経とも

元禄六年
四月吉日

江戸日本橋ふ所
菊屋清兵衛
大坂心斎橋上人町
屋金屋孫兵衛
油屋宮右衛門
京
松屋藤平左衛門
板

明治廿三年八月吉日
名古屋市柳町の仮宮にて写し終る